

●特別賞【論文概要紹介】

県内初！ こども発達相談センター の開設に向けて

茨城県日立市教育研究所 おおち ひとし
大地 齊

【実践の概要】

本研究は、近年教育現場で大きな問題となっている発達障害児への早期相談及び早期総合支援を推進するため、教育研究所がどのような役割を果たしてきたか、また、どのようにして県内初の「こども発達相談センター」を開設することができたのか。その経緯から、教育と行政（保健、福祉、保育）、医療の三者による連携の必要性を明らかにするものである。

【論文内容の紹介】

1. 発達障害児の実態

ここ数年、教育現場では自閉症、LD（学習障害）、ADHD（注意欠陥・多動性障害）、高機能自閉症という言葉聞く機会が頻発し、指導面で困り感をもつ教師が急増している。

では、これらの発達障害児はどのくらいいるのだろう。市内調査の結果は、幼稚園が12.5%、小学校6.6%、中学校4.1%である。文部科学省の発表数値6.3%に近いものがある。市内小中学校だけでも約960人である。

この調査から、発達障害は二次的障害を引き起こすことが判明した。発達障害のある中学生の2割が不登校になり、同じく2割が反社会的な行為を行っている現状が明らかになったのだ。今、多くの中学校が抱えている生徒指導の問題の根っこは、発達障害児の二次的障害であると

考えても過言ではない。

2. 発達障害児への支援と対策

発達障害児の子どもと親は、どこへ相談に行けばいいのか。困っている相談者をたらい回しにしてはいけない。我々は理想のワン・ストップ相談所の開設をめざし、行政、医療、教育の代表機関であるこども福祉課、障害福祉課、保健センター、教育委員会の学務課、生涯学習課、指導課、教育研究所、さらに特別支援学校などの機関を集めて、特別支援教育連携協議会を開催した。

3. こども発達相談センター設立

特別支援教育連携協議会での1年間の研究協議を経て、「日立市こども発達相談センター」を設立することになった。発達障害児の早期発見と発達障害の可能性のある子どもと保護者に対して、早期からの相談、検査、訓練等の総合支援を行うのである。

こども発達相談センターは、以下の相談と支援事業を行っている。

- (1) 専門心理相談員による発達相談
- (2) 早期発見及びスクリーニングの研究
- (3) 小児科医による医療相談
- (4) 相談・支援用の個人ファイルの作成
- (5) 小集団ソーシャルスキル指導教室
- (6) 小学校・保育園・幼稚園への巡回相談
- (7) 理解啓発のための研修会の実施

4. 研究のまとめ

我々には発達障害児の発生を防ぐことはできない。しかし、こども発達相談センターに通ってくる子どもを半年間観察していて、自信をもっていえることが一つある。それは、「発達障害児の二次的障害は防ぐことができる」ということだ。そのために必要なこと、それは周囲の人の「理解と支援」である。

電話相談で母親の声が明るく弾んだとき、相談室を出ていきながら何度もお礼をいう親に出

会ったとき、SSTでマジックミラーの向こう側にこぼれる笑顔の幼稚園児を見たとき、「こども発達相談センター」を開設できて本当によかったとしみじみ思う。

●奨励賞「論文概要紹介」

江戸時代の文化を 楽しく学習し、 その文化のよさに気づく 指導方法の工夫

—「花火」「旅」の教材化を通して—

千葉県山武市立南郷小学校 かたおかだいすけ 片岡大輔

【実践の概要】

本研究は、第6学年「江戸時代の文化」における授業実践についてまとめたものである。授業を通して人物名や文化遺産の名前を覚えることだけではなく、江戸時代の文化の面白さや素晴らしさを児童に気づかせたい。そのために児童にとって身近な「花火」「旅」を教材化して、授業を行った。

【論文内容の紹介】

1. 論文の概要

(1) 研究主題を達成させるための手立て

① 児童が楽しく学習できるように、児童にとって身近なものを教材化する

○アンケートを行った結果、児童にとって「花火」と「旅」が身近だったので、「花火」と「旅」を教材化する。

② 資料を精選して提示し、児童が資料の読み取りや話し合いを通して江戸時代の文化のよさに気づいていく授業構成にする

○様々な書籍から絵画資料や読み物資料などを精選し、提示する。

(2) 単元構成（7時間扱い）

① 町人の文化が栄える

第1時 花火（平和になった象徴）

第2時 旅

（庶民の生活にゆとりが生まれた象徴）

第3時 浮世絵（文化の高さを表す象徴）

② 新しい学問が起る

第4時 解体新書（蘭学が発展した象徴）

第5時 伊能図（蘭学の影響を受けた象徴）

第6・7時 発展（各自でテーマを決めて、江戸の文化について調べる）

(3) 「花火」の授業（第1時）

① 本時の目標

- ・今まで兵器として利用されていた火薬が、「花火の製造」という「火薬の平和利用」に転換したことをつかみ、平和な世の中になったことに気づくことができる。
- ・町人が花火を楽しんでいることから、町人も生活を楽しんでいることに気づくことができる。

② 本時で使用した資料と中心発問

- 浮世絵「東都両国橋夏景色」
- 年表「花火（火薬）の年表」（鎌倉～江戸）
- 其角の俳句「一両が花火間もなき光かな」
- 図「1両の価値」

「日本で花火が作られるようになったのは江戸時代からです。なぜ江戸時代から作られるようになったのでしょうか。」

「約1両する打ち上げ花火を買ったのは、どの身分の人でしょうか。」

(4) 「旅」の授業（第2時）

① 本時の目標

- ・旅を学習することを通して、江戸時代、町人や農民の生活にゆとりが生まれたことやその理由に気づくことができる。
- ・浮世絵「東海道五十三次」や滑稽本「東海道中膝栗毛」から、江戸時代の旅の様子を

考えることができる。

② 本時で使用した資料と中心発問

- 浮世絵「東海道五十三次 池鯉鮒」
- 滑稽本「東海道中膝栗毛 品川宿 神奈川宿」
- 浮世絵「伊勢御遷宮参詣群衆之図」

「なぜ大勢の町人や農民が旅を楽しめるほど生活が豊かになったのでしょうか。」

2. まとめ

- 「花火」「旅」の教材化により、どちらも楽しく、かつ単元の目標に迫ることができる授業になることが分かった。
- 児童同士の話し合いをさらに活性化させるために、発問や学習形態を工夫する必要がある。

●奨励賞【論文概要紹介】

言葉の学習としての
小学校外国語活動

埼玉県春日部市立備後小学校 麦倉芳信

I はじめに

よりよい外国語活動とは何だろう。いつも自分自身に問いかけている大切な質問である。

平成23年度より完全実施となる外国語活動をめぐっては、現場から困惑の声がよく聞かれる。私自身も悩むなか、平成21年度埼玉県長期研修生として、東京学芸大学において1年間の研修を受ける好機を得た。現在、私が授業づくりの柱と考えているのは、次のとおりである。

英語は言葉である。だから、言葉の特性を生かした活動を展開していくべきである。

II 言葉の特性とそれを生かした実践

1 言葉の特性

言葉とは一体何か。それは、私たちの心に生まれた思いに、ルールに則った音声を貼りつけ、伝えることができる形にしたもの、といえるだろう。それゆえに言葉には必ず「思い」が宿っている、ということも忘れてはならない。

私たちは言葉をどのように身につけてきたのだろうか。言葉を獲得する仕組みは未だ解明されていないにしても、まず「聞く」ことから始まり、聞き続けながら相手が何をいっているのかを考え、推測し、そして「話す」「読む」「書く」へと発達していったことは否めないであろう。

英語は日本語と同じように言葉であり、子どもたちは英語という2番目の言葉に初めて出会うということを踏まえ、授業ではどんな言葉をどんなふうに聞かせていくべきだろうか。

2 言葉の特性を生かした実践

(1) 言葉を聞かせる授業づくり

その際留意すべきは、次の3点である。一つ目は、言葉本来の形、思いの宿る言葉を聞かせること。繰り返し練習のような、言葉の抜け殻を聞かせないようにする。二つ目は、話し手が何を言っているのかを考えさせるため、工夫して英語の文章を聞かせること。その際の工夫は、次の7点である。①子どもたちが既に知っていそうな語彙の使用、②目の前の視覚情報（「今、ここ」のこと）を聞かせる、③子どもたちにとって理解しやすい活動、④繰り返し聞かせる、⑤文章の中に日本語の語彙を入れる、⑥質問をした後、すぐに答えの例をさりげなく聞かせる、⑦子どもたちにとって身近な題材を使用する。三つ目の留意点は、英語のルールに則った正しい英語を聞かせること。そのための助けとなるのは、次の3点である。①歌やライムの

活用、②聞かせる表現を一つに絞る、③視聴覚教材の活用。

(2) 話すことを決して急がせない

現在多くの授業で、最初に表現の練習、後半でインタビューゲームなどをする形態がみられる。しかし英語は言葉なのだから、どんな短い表現でも30分程度で「話す」ようになることは無理であり、話すことを決して急がせない態度が重要である。

(3) 安心できる環境づくり

英語は言葉なのだから、子どもたちにとって安心できる環境でこそ、育まれていくはずである。そのような環境をつくるためのポイントを三つ挙げる。①信頼関係が築かれ、安心して発言できる、②授業に参加しているという満足感がある、③活動が安全である、ということである。

Ⅲ おわりに

本年度は6年生担任として、「言葉の学習としての外国語活動」を実践してきた。子どもたちは週1回の外国語活動を楽しみにしており、英語を言葉として自然に受け入れていることを、担任として実感している。

夏休み中には、研修会で理論と実践を紹介し、「これならできそう。」「やってみたい。」という反応をいただいた。一度この考え方を体得すれば、教師自身が楽しみながら授業づくりができることも魅力である。

「言葉」を大切に育てることは、「思い」を大切に育てることにほかならない、と考えている。子どもたちと私たち教師にとって、よりよい「言葉の学習としての外国語活動」が展開できるよう尽力する所存である。

●奨励賞〔論文概要紹介〕

ICT学習支援 ネットワークを活用した 社会科学学習指導の工夫

福岡県福岡市立城南小学校 くばらてつや
久原哲哉

〔研究の目的〕

本研究では、社会科学学習において思考力・判断力・表現力を育むために、ICT学習支援ネットワークの特性を活かし、専門的な知識をもった方との交流を行った。

〔ICT学習支援ネットワークとは〕

ICT学習支援ネットワークとは、電子掲示板を活用し、専門家や企業等がもつ情報を活かして、子どもたちの学習を支援する情報ネットワークのことである。子どもたちはICT学習支援ネットワークを活用することにより、学習課題に対して、専門的な知識や幅広い情報を収集し、活発な学習活動を行うことができると考える。

〔研究の実際〕

子どもたちは、小学校5年生社会科「自動車生産に励む人々」の学習で、ICT学習支援ネットワークの特性を活かし、専門的な知識をもった自動車会社や工業高校自動車工学科の生徒と電子掲示板を通して交流活動を行った。

○ 情報を収集・判断する力を育む活用

前单元「稲作に励む人々」の学習で、初めてICT学習支援ネットワークを活用し、その有効性を実感した子どもたちは、本单元において情報収集の方法に変化がみられた。前单元では、

無作為に電子掲示板で質問をしていたが、本単元では、「この情報はインターネットや書籍から」「この情報は電子掲示板から」と知りたい情報の種類によって情報手段を選択し、効果的に情報の収集を行うようになったのである。これは、子どもたちがそれぞれの情報手段の特徴を捉え、効果的に活用しようとしたためだと考えられる。

このように、知りたい情報の内容により、情報収集の方法を選択し、必要な情報を判断する姿がみられた。

○ 思考力・判断力を育む活用

子どもたちは収集した情報を、校内LANを活用し「自動車データベース」に蓄積していった。子どもたちは「自動車データベース」に一人一つのデータベースをもち、インターネットや電子掲示板・インタビュー等で収集した情報を蓄積していった。

A児は、環境に優しい車づくりを課題とし調べ学習を行った。A児は自分が収集した情報と友達がデータベース化した「環境問題の情報」「車の走行による二酸化炭素の排出量」「環境に優しい車をつくる人の願い」等の情報とを関連づけ、考えをまとめていった。そして、地球温暖化の観点からみた環境に優しい車づくりの必要性を痛感し、考えを深め具体化していった。

このように、情報をデータベース化することで、複数の情報を関連づけて自分の考えを深め思考力・判断力を育むことができた。

○ 表現力を育む活用

振り返る段階で、日常的に電子掲示板で交流を行ってきた自動車会社や工業高校の生徒に参加していただき、発表会を行った。子どもたちは、電子掲示板を通して交流を重ねてきたことで、その人たちに会えることをとても楽しみにしていた。B児は、「いろいろ教えてもらった工業高校の人に発表を聞いてもらいたい」という願いをもった。それが明確な相手意識となり、より分かりやすいプレゼンや発表内容をつくるという表現力の育成につながった。

〔まとめ〕

以上のように、ICT学習支援ネットワークを効果的に活用し、専門的な知識をもった方と交流することで、子どもたちは意欲的に学習を行い、知識・技能のみならず思考力、判断力、表現力を育むことができたといえる。

●奨励賞【論文概要紹介】

子どもたちと地域に あたたかい絆が生まれる 環境学習をめざして

兵庫県たつの市立小宅小学校 いしどう ひろし
石堂 裕

【実践の概要】

赤とんぼがとびかうまちプロジェクトは、地域貢献活動の一環として3年生が毎年行っている環境保全活動である。学校研究テーマに掲げる「人とかわる力」を定着させるために、子どもたちは、8ヶ月間、友達や地域の方、そして自然環境に主体的に関わり、環境への気づきや命のつぶやきを感じ取ってきた。子どもたちの気づきで学習がつながっていく過程とその学びを紹介する。

【論文内容の紹介】

1. 学習のつながりを大切に

○ グラフによる整理が理解を深める

山根川のクリーン作戦によってできたゴミの分別結果をグラフ化した結果、子どもたちはビニルゴミの多さに気づいた。話し合いの結果、

ビニルゴミの減量化に向けて、制服の残り生地
でエコバッグをつくり、市のマイバッグ運動に
参加することになった。グラフによる気づきか
ら、地域の方にゴミの減量化を呼びかけるだけ
でなく、子どもたち自身も自らゴミの減量化に
取り組む活動となった。

2. 教科等とのつながりを意識して

理科学習と関連させ、チョウとトンボの飼育
を行った。チョウの卵とヤゴから飼育を行う過
程で、子どもたちは、変態の違いや羽化の共通
点と差異点について理解を深めた。学習過程に
おいて、デジタルカメラによる記録観察が、気
づきを深めるのに効果的だった。

3. 環境保全活動が地域を変える

(1) 荒れ地をミニ広場に

山根川のゴミ拾いととも、数年前からゴミ
捨て場となっていた河川敷の荒れ地を、PTA
やお年寄りの協力のもと、整備してミニ広場
に変えた。子どもたちの取り組みが地域の方の心
を動かすきっかけになった。

(2) 命を育むビオトープづくり

生き物が住みやすい環境を求めて、2ヶ月か
けてビオトープを完成させた。毎日、意欲的に
観察する姿がみられた。

4. 人との関わりが力を伸ばす

(1) 市内テレビ会議交流

アキアカネに関する目撃情報を得るために、
市内全小学校3年生にメールを使って呼びかけ
たところ、市内の小規模校3年生から返事があ
り、その学校とテレビ会議で交流会をもった。
実際にアキアカネの卵も少しゆずり受け、飼育
した結果、1匹が孵化に成功し、ヤゴをビオト
ープに放流することができた。

(2) 発表会が力を伸ばすきっかけに

学習成果を地域に発信することは、子どもた
ちの「人とかかわる力」を伸ばすのに欠かせな
い。そこで、地域の方を招待し、学習成果を伝

えるための発表会を開催した。参加者の感心す
る様子で子どもたちの自尊感情が高まった。

(3) 評価活動にも仲間とのつながりを

小ステップごとに、評価活動に取り組んだ。
自己評価だけでなく、相互評価、パフォーマン
ス評価を行うことで、自分自身のよさに気づく
子どもが増えた。

5. 終わりに

この活動が、学校評議委員会で話題となり、
高評価を受けた。今後も子どもたちと地域を結
ぶ絆づくりに努め、心の中に地域を愛する心を
育てたいと思う。